

# 保育現場に求められる音楽表現指導の能力育成に関する実践報告

A Report on the Training of Teaching Ability for Musical Expression Required  
for Kindergartens and Nursery Schools

内山 菜津子  
UCHIYAMA, Natsuko

キーワード：音楽表現指導法、表現（音楽）、保育者養成、幼児教育

## はじめに

本稿は、こども教育宝仙大学（以下、本学）こども教育学部3年生の授業科目「音楽表現指導法演習」（2018年度）の実践報告である。

本学では、2年次までに「音楽演習（基礎・応用）」などの授業で、個人的な指導を含め、器楽（ピアノや打楽器）や声楽を学んでいる。それらを経て、3年次では「音楽表現指導」という観点で、これまで培ってきた音楽能力を現場でどのように応用し、子どもと音楽を通してどのような活動を展開していけるのかを学んでいる。その目的は、学生の技術の向上だけではなく、子どもの表現を捉える目を育てることに重点を置いている。

「幼稚園で音楽活動をする」と聞くと、多くの学生は「子どもに音楽を教えなければならない」と、“教えること”に着目してしまいがちである。よって、保育者のピアノに合わせて子ども達が歌を歌うという、歌唱指導の場面を思い浮かべることが殆どである。しかし、保育現場での音楽活動とは、歌唱指導や器楽指導に偏ったものではないということを、まずは学生に伝えていかなければならない。筆者は10年間幼稚園教諭としてクラス担任をした経験があり、日々展開される子どもの遊びの中で、様々な子どもの表現をみつけてきた。そこで繰り広げられる子どもらしい表現の中には、音楽的要素がたくさん隠れている。それらを保育者が音楽的に捉え、表現遊びやリトミック、リズム遊び等に繋げていくことが、本来の幼児教育における音楽表現指導であると筆者は体感していた。勿論、皆で声を合わせて歌うことの喜びを感じる歌唱の指導も必要ではあるが、保育者が教える音楽だけでなく、子どもが感じた音楽を広げられるような配慮

をし、音楽することが好きであるという子どもを育てていくことが大切だと考えている。

このように、保育現場で求められている音楽表現指導ができるよう、3年次春学期15回の授業で実践してきた内容を報告する。

## 1. 「音楽表現指導法演習」の授業概要と到達目標

ここでは、「音楽表現指導法演習」のシラバスに記載している授業概要と到達目標について述べる。

### 1) 授業概要

幼稚園教育要領・保育所保育指針における、表現に関する領域を音楽的表現の視点から学ぶ。乳幼児期の音楽的な成長・発達の特徴について理解を深め、幼児の音楽的な成長を促すために必要な保育者の援助について学習する。また、幼稚園や保育園における、音や音楽にかかわる様々な表現活動と、幼児を指導するための具体的な指導方法についても学ぶ。具体的には、「ボディパーカッション」「絵本と音楽」「リトミック」「器楽合奏」など幼児期に適した様々な音楽活動を学習すると共に、「手遊び」「わらべうた」など保育を展開するための教材研究も行う。

### 2) 到達目標

本授業は幼稚園教育要領、保育所保育指針における、「表現」に関する領域を音楽的表現の視点から学ぶことを目的とする。

## 2. 15回の授業の指導計画

2018年度春学期に実践した「音楽表現法演習」の15回の授業のねらいと主な内容は、次の表1の通りである。

表1 2018年度「音楽表現指導法演習」指導計画

回	ねらい	内容(項目)	歌	評価
1	授業の概要を知り、今後の見通しを持つ。	◎オリエンテーション ◎4月にクラスで出来る音楽遊び ◎保育のツールとしての音楽(現場で役に立つ)	「せんせいとおともだち」 「あなたのおなまえは」 「あくしゅでこんにちは」	
2	幼児にとっての表現について考える。音楽を聴いて動いてみることで幼児の気持ちを体感する。	◎「表現」とは ◎幼児の表現の「芽」について ◎保育者としての感性、センサー ◎幼児のリズム遊び-リトミック	「ピクニックマーチ」	
3	幼児の音楽的発達を知る中で、幼児の音楽表現について考える。	◎幼児の音楽的発達 ◎幼児の音楽表現 ◎保育者の役割	「はじめの一步」	リズムミニテスト
4	幼児にとっての音楽と動きについて考える。リトミックの実際を見ることで自分なりに感じたことを言葉にする。	◎音楽と動きの関係性 ◎リトミック教育が育てるもの(DVD鑑賞により実践を知る) ◎良い流れ、良いリズムとは?		レポート記述
5	わらべうたについて理解し、わらべうたを通して子どもとどのように遊びを展開していきけるかを考える。	◎わらべうたについて ◎わらべうたの特徴①自然発生的な歌 ◎乳幼児期に遊ばれる、1対1で遊べるわらべうた(実践)	「びわ」	
6	わらべうたの特徴を理解し、実践を通して子どもが遊ぶ様子を見通す。	◎わらべうたの特徴②要素 ◎わらべうたの特徴③旋律の特徴 ◎幼稚園でよく遊ばれる、わらべうたを使った集団遊び(実践)	「せかいじゅうのこどもたちが」	
7	手遊びについて理解を深め、保育現場で幼児と歌う事を想定しながら必要性を考える。	◎手遊び歌について ・音楽的要素 ・保育現場での必要性(場面)	「青い空に絵をかこう」	わらべうたミニテスト
8	幼児と歌うことを想定して弾き歌いをする。人前で弾く時の自身の良点と弱点を知る。	◎弾き歌い試験 ◎音楽活動指導案記述		弾き歌い試験(自己評価シート)
9	保育で使われる楽器について理解を深め、どのような活動を展開していくかを考える。	◎幼児にとって楽器とは(1) ・教育要領から読み取る ◎幼児にとって楽器とは(2) ・適した楽器、活動内容 ◎オルフの音楽教育 ◎カスタネットについて(歴史) ◎カスタネットをならしてみよう	「ぼくのミックスジュース」	
10	保育で使われる楽器について理解を深め、どのような活動を展開していくかを考える。	◎知っておきたい器楽の歴史 ◎タンバリンについて ◎鈴、トライアングルにも触れてみよう	「ホホホ」	
11	幼児と楽器とのかかわりを想定し、合奏を考える。仲間と意見を出し合い、1つのものを創り上げる。	◎幼児が扱う楽器について(復習) ◎グループで合奏を考え、練習する。	「ニャニュニョの天気予報」	
12	仲間と協力し、合奏をする。相手を評価し、評価されることで、様々な視点があることに気付く。	◎グループ合奏練習 ◎グループごとに発表する	「にじ」	グループごとの器楽合奏
13	絵本に音楽がつくことで、幼児が何を感じるのかを考える。絵本を通じた活動の幅を広げる。	◎絵本と音楽 ・お話に音楽をつけるとは ◎絵本と動き ・言葉を用いた表現遊び	「きのこ」	
14	幼児の姿を想定しながら、幼稚園での音楽表現活動の指導案を作成する。	◎幼児の音楽的な発達(復習) ◎音楽表現活動の指導案考案 ◎講師によるウクレレ演奏 ・音楽活動はピアノ以外でもできる! ・対面で子どもと歌うレクリエーションソングの紹介	「ヤンチャリカ」 「友達はいいもんだ」	
15		◎試験 ・幼稚園での音楽表現活動の指導案作成 ◎学生のお悩み相談返答	「やっほっほなつやすみ」	指導案作成

### 3. 授業内容

授業内容に関して、配慮していたことや意図してきたことを次に記す。

#### 1) 手遊び実践について

毎回授業の冒頭に、2、3名ずつの学生が皆の前で手遊びを披露した。その際、「対象年齢」と「保育のどの場面で行うのか」を想定し、皆に伝えてから始める。その都度手遊びについて振り返り、講師によるアレンジの提案等も行った。

手遊びは、保育現場で最も多く行われる音楽活動の1つである。目の前の子どもに対して、今どのような手遊びが適しているのかを考え、また次の活動への導入として行うこともある。

#### 2) 子どもの歌の紹介と実践

授業の中で、現場でよく歌われている子どもの歌を紹介した。紹介する歌は、特に筆者が幼稚園現場で子どもと多く歌った歌や、子どもが実際に好んでいたものを選んだ。その中には、何年も前から歌い継がれてきた歌もあれば、近年よく歌われるようになった歌もある。学生には、いつの時代も子どもが好きな歌や楽しめる歌は必ずあるという思いを持ってよう伝えていた。また、歌うだけではなく、その歌に適した年齢や、時期、流れ、場面なども想像しながら歌えるよう声を掛け、1つの歌に対して様々な視点で考えられるようにしていた。中には、振り付けをするとより楽しめるという発案もあり、歌に合った振りを考える場面もあった。

#### 3) 様々な音楽教育方法の紹介と理解

幼児への音楽教育について学んでいく中で、「リトミック」「コダーイアプローチ」「オルフ楽器」という3つの音楽教育方法を学んでおくことは重要である。また、それぞれの特徴を捉え、それを幼児への教育と照らし合わせて考えた場合、保育者としてどのような関わり方が適しているのかについても、合わせて伝えるようにしていた。具体的な内容は、次の通りである。

##### ①リトミック（第2、3、4回）

昨今、「リトミック」が保育現場で流行し、実践している園も少なくない。しかし、今日の幼稚園での音楽教育に関する研究の中で、「リトミックの名前を知らない保育者がいなかったことから、幼児教育の分野で、リトミックの知名度は高いといえる。しかし、リトミックが何の為に創案されたのかとい

うことに関して回答できた保育者は3割にとどまり、リトミックが音楽教育の一方法論であるという理解が徹底されないまま、実体験を拠り所にして、リトミックの一側面のみが保育の中で取り入れられている現状が推察された」（長島2010：93）とあるように、創案者であるJ=ダルクローズ（Emile Jaques-Dalcroze, 1865-1950）の理念やリトミックの理論が理解されないまま実践されている場合もある。そこで、授業の中では、理論と実践の指導を相互に展開しながら学生自身がリトミックの本質を理解できるよう配慮した。

まず、リトミックの目的である内的聴覚の重要性について説明し、その後心唱することを学生自身がリトミックの身体活動を体験しながら理解できるように促した。

次に、リトミックの3本柱と呼ばれる「リズム運動」「ソルフエージュ」「即興演奏」について理論を学んだ後、特に幼児期に適している身体運動を用いた音楽活動の展開を実践した。それは、振り付けによる踊りとは異なる。音に合わせて歩く“歩行”から始まり、曲調に合わせた自由表現やルールがある中で楽しむリズム遊び等、方法は様々である。また、「リトミックの主な原理は、教師の即興演奏を手がかりとした学習者の即時反応の活動を通じて、感覚的なセンスを研ぎ澄まし、創造的な活動の中で心身の一致調和した状態を生み出す事にある」（神原2014：41）とあるように、講師（筆者）の即興演奏に合わせて動く中で学生自身が即時反応を体験し、音楽をよく聴きながら楽しむ感覚を養うようにした。

##### ②コダーイアプローチ（第5、6回）

コダーイ（Kodaly Zoltan, 1882-1967）は、歌唱活動を中心としたソルミゼーションやハンドサインを導入し、音楽的基礎力の育成に努めたことで知られている。学生にもハンドサインを体験させ、音を見える化することで仲間と声を合わせることができるといことを体感してもらった。それは、幼児にハンドサインを指導するというのではなく、楽譜が読めない幼児にとって、視覚的なアプローチで音楽を伝えることもできるということを理解するための、1つの手掛かりである。

さらに、コダーイアプローチの特徴として、わらべ歌を用いた音楽教育がある。わらべ歌による遊びは、幼児教育においても非常に重要な音楽活動の1つである。そこで、保育現場でよく扱われるわらべ歌を、乳児編・幼児編と2回に分け、わらべ歌の特

徴やそれぞれにどのような音楽的要素が含まれているのかを、実践を通して理解させるようにした。

### ③オルフ楽器 (第9、10、11回)

カール・オルフ (Carl Orff, 1895-1982) は、「音楽学習における初歩の学習を重視し、無理のない学習のステップを説いた。(中略)つまり、平易なリズムや旋律を用い、しかも音楽的に豊かな内容を含む音楽体験を提供することを目指した」(神原2014: 44) とあるように、幼児にとっても豊かな音楽体験が出来る教育法を提唱していた。その功績の1つに、オルフ楽器の開発がある。自在に鍵盤が取り外せる木琴などが特徴的だが、それを用いて子どもたちは簡単な曲作りを行うことができる。学生には、実際に簡易打楽器を使ったりリズムアンサンブルをグループ活動で創作させ、オルフの理論と目的への理解を図った。

### 4) 絵本と音楽 (第13回)

保育現場で、子どもにとって絵本は欠かせない教材の1つである。視覚的教材として、他にもパネルシアターやペープサート等、様々な教材があるが、今回は絵本を用いた音楽活動について学生が理解を深めるよう努めた。

絵本を用いた音楽活動は、大きく分けて2つある。

1つ目は“お話に音楽を付ける”ことであり、言葉の通り、絵本の言葉に音楽を付けることである。例えば、繰り返される言葉に節を付けることで、子どもから自然に歌が表出される。また、お話の内容や絵からイメージした音楽を付けることもできる。それは、保育者が付けることもできるが、子どもがイメージに合う音を探したり、歌ったりする等、創造的な活動に繋がる場合もある。

2つ目は“言葉を用いて表現遊びをする”ことであり、特にオノマトベから連想される身体表現を子どもが表出することが多くある。また、言葉をリズムとして捉え、保育者は、絵本に出てくる言葉を用いたリズム遊びに展開することもできる。

このように、絵本を“読む”だけでなく“歌う”“表現する”といった方法もあるということを経験させ、絵本を用いた教育方法の視野を広げられるよう配慮した。

### 5) 保育現場で活用するための理解

この授業で最も心掛けていたことは、ここで理解した内容と実践を、保育現場でどのように活かしていくか、ということである。受講者の3年生の殆どが保育所実習経験者である為、保育現場での場面や子どもの様子は想

像できたようだ。そこで、同じ教材・テーマであっても、「5歳児であれば、」、「3歳児の場合は、」と年齢や発達に適した関わり方を学生自身が常に考えられるように言葉掛けをしていた。学びの中で実際の子どもの姿を想像し、予想することは、授業で学んだ事柄について理解を深めると共に保育現場での実践に繋がるであろうと考えている。さらに、筆者が幼稚園在職中、実際に経験したエピソードを伝えることで、学生の保育現場のイメージがより濃くなっていったように感じた。

このような内容を繰り返し、最終試験の課題として、「音楽表現活動の指導案」を学生一人ひとりに作成させた。

## 4. リアクションペーパーによる学生の気付き

毎回授業の後半に、その日学んだことを学生自身が振り返ることを目的とし、リアクションペーパーの記入を課題とした。そこには、活動記録ではなく、自身が考えたこと、分かったこと、気付いたことや、質問などが書かれていた。ここでは、学生のリアクションペーパーの内容から、保育現場をイメージして取り組んだことによる気付きを6つのポイントに整理して示す。これらは、全学生の声ではないが、殆どの学生が類似した内容を記述している。重要な気付きや視点と思われた部分には、筆者が波線を付け足した。

### ①保育者の姿

「子どもたちに恥ずかしがらず楽しんでもらうため、保育者が楽しそうに動くことが大切のかなと考えました。」

### ②表現

「リズムに合わせて身体を動かす時、私はどう動いたら良いか分からず周りの様子を伺いながら他の人と同じ様な動きをしていましたが、『自分と同じ気持ちの子どもに寄り添うことが出来る』という先生の言葉を聞いて何だか安心しました。自分らしく自分にしかできない表現の仕方をこれから見つけていけたら良いなと思いました。」

「幼児の表現は様々で、それを受け止めてその子なりの表現を良い方向へできるように声かけや働きかけをすることで子ども自身の音楽的発達が促されると思いました。どのようにすれば子どもが自分からやりたいと思うことができるかを考えながら、子どもと関わっていききたいです。」

### ③手遊び

「先生がアレンジを加えてやっているのを見て、こんなやり方もあるんだ、1つだけではなくアレンジをすることで子どもも飽きずに楽しんで出来るなと思った。」

「手遊びをただ一定のリズムや大きさを歌うのではなく、音楽の要素を織り交ぜることで、子どもたちも飽きることなく楽しめるし、同時に音楽の楽しさも味わえるので、現場での手遊びに活かしていきたいと思った。」

「何歳児向けなのか、と考えたことがなかったので、季節や年齢も気にして選んでいこうと思いました。」

#### ④器楽

「私が楽器を使う時、渡す前に『渡されたら音は鳴らさずに待っていてね』と注意を促すと思います。しかし、今日の授業で子どもの気持ちを考えるようにと言われ、まずは思う存分音を鳴らせる時間を作ろうという考えに変わりました。」

「工夫して、子どもでも出来るだけ簡単に出来る様考えることが大事だと気付きました。」

「子どもが演奏しやすいテンポを考え、子どもに合わせた合奏を作ることは難しかった。」

「子どもたちが合奏を楽しみ、楽器に触れる楽しさを感じられるようにし、また合奏がしたいと思えるような活動にする必要があると思いました。」

#### ⑤絵本

「今回、こんなにも楽しく絵本が見れるのか、一緒に歌いたくなるものかとワクワク・ドキドキしました。自分も是非取り入れたいと思いました。」

「歌が入ることで、知っている絵本だが、知らない絵本の様な気がした、自分自身の読み聞かせでも使いたいと思った。」

#### ⑥歌

「歌う、心唱する、手拍子をつける、楽器を鳴らす、振付をする、と1つの曲でも何回も楽しむことができると思いました。」

「手話ソングで、子どもの前で手本をやる時は0.5秒早く先生が動くということを学び、実習で活かせることだと思いました。」

「楽譜通りにやってみるのも良いが、先生がやっていたように、その場に合わせる、子どもたちの様子を見ながらやるとより楽しめるし、印象が強く残るのではないかと思いました。子ども目線で考えて行うことは大切だと活動の中で改めて感じました。」

## 5. まとめと考察

ここまで、授業の内容と配慮した点についてまとめ、学生の反応をリアクションペーパーの記述内容を基に整理した。筆者が意図していた内容全てを学生が吸収してくれたとは断言出来ないが、学生の記述から次のことが概観できる。

保育現場での保育者の在るべき姿に気付いたという内

容が多いことから、保育における保育者という人的環境の大切さを感じたと考えられる。また、「その子なりの表現を受け止める」「子どもの気持ちを考える」「子どもが楽しめる方法」「またやりたいと思える活動」というキーワードが多く見られたことから、活動を展開していく中で子どもの気持ちを理解し、子ども目線で考えてみるという捉え方ができたようである。さらに、音楽活動に対して、固定概念を持つのではなく、1つの教材を様々なアプローチで楽しみ、それを学びに繋げていく方法があることも理解したようである。

以上のことから、15回の授業を通して、学生自身がこれから現場で活かせる具体的な方法だけでなく、子どもを捉える視点も身に付いたということがわかった。しかし、限られた授業回数の中に多くの内容を盛り込んだ為、十分に理解することが難しかった学生も少なからずいたことも考えられる。リアクションペーパーでは理解できたとしていることも、実際どのように感じていたのか、一人ひとりをさらに見ていくことも大切である。

## 6. 今後の課題

本稿で述べた音楽表現指導の実践はあくまでも授業内でのことであり、それを実際に学生自身が現場で経験することが最も重要であると筆者は考えている。今後は、本授業で学んだ学生が3年、4年時の保育所や幼稚園実習において展開する音楽活動の実際、またそこで課題となる事柄について探っていききたい。そこから、本授業にさらに求められることが見出せるのではないかと考えている。

## おわりに

筆者は幼児期の音楽活動を「保育者が教える音楽だけでなく、子どもが感じた音楽を広げられるような配慮をし、音楽することが好きであるという子どもを育てていくことが大切」と考えている。この事について、様々な活動やアプローチを紹介しながら、学生の実践も交え、全15回の授業で伝えてきた。学生の声はリアクションペーパーの他、放課後の雑談の中でも知ることができたが、その多くは「今日の授業、楽しかった」という言葉であった。それは、学生自身が音楽活動を楽しんだという事であり、それに対して筆者は「子どもたちも同じ」である事を学生に伝えてきた。保育者自身が楽しめる活動は、必ず子どもも楽しめるものであり、保育者が楽しそうに活動している姿や表情は子どもの心に響くものである。この授業で培った「音楽を楽しむ心」と「子どもの気持ちを捉えて活動を展開したいという気持ち」を忘

れず、それを実際に保育現場で実践できる、音楽表現力  
豊かな保育者になることを、願うばかりである。

#### 引用文献

- 神原雅之2014『幼児音楽教育要論』開成出版  
長島礼2010「保育現場におけるリトミックの理解に関する一  
考察—質問紙調査から見える課題—」教育学論究第2号  
(89-94)